

過書中江

木村宗右衛門

〔御當家令條十九〕覺

一過書船上米之事、百石付而銀子六匁宛相定上は、爲兩人請取之、木村總右衛門、角倉與市方江可

納之、并船數兩人次第數多可申付事、

一從伏見下船乘人荷物之上米之事、如先規右兩人方江可納之、船數同前、

附船賃可爲如先々者也

元和二年辰

〔京都御役所向大概覺書三〕大坂より伏見過書船之事

一過書船數大小七百五拾艘

支配人角倉與市方、木村宗右衛門

但三拾石積より貳百石積迄、只今有船、公用并往還之荷物應多少、船數増減有之、

船間尺

三拾石積總長五丈六尺、

但極印舟大小ニより、其船右數之文

貳百石積總長拾丈壹尺五寸、

字、并過之字之極印、船側ニ打申候、

但四拾石積より百九拾石積迄、右之積を以、舟造り申候、同右數之舟ニ而も、木品又者作り様

之なりかつこうニより、長短幅深サ共ニ大小有之間尺揃不申候、然ども荷物積足は、新造之

節、役人共立會相改積足極メ、舟毎ニ黒印打候由、

一過書船御運上銀、壹斗ニ銀四百枚宛、大坂御城江上納仕、年中御用役相勤ル、

但往古者、右御運上銀貳百枚、元和元卯年より、四百枚宛上納仕候、

一角倉與一過書支配之由緒、前ニ記之、